リリカルで『遺失物』な少年の漫遊記

ワカタキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルで『遺失物』な少年の漫遊記

【Ｎコード】

Ｎ９９６６Ｌ

【作者名】

ワカタキ

【あらすじ】

とある理由から『魔法少女リリカルなのは』の世界に転生してきた主人公。そんな彼の新たな体は『ロストロギア』だった！？

前書き

初めて投稿しました、ワカタキです。

この小説は「魔法少女リリカルなのは」の二次創作小説です。
以前は他のサイトで掲載していました。内容は以下の通り

・転生オリ主モノ
・主人公が自重しないかも
・ご都合主義な展開あり
・厨二病大好き
・原作キャラ崩壊する可能性あり（主にネタ要員とか）
・原作キャラとのカップリングあり
・ネタの割合高め（本編からは未定）
・クロス要因あり
・オリ設定あり

以上の事が苦手な方はご遠慮ください。

自分は文章が下手＋ガラスのハート（？）ですが、どうかよろしくお願いします。

プロローグ

『小学校』
義務教育の第一段階で、初等普通教育を施す学校。修業年限は６年。学齢に達した満６歳から満１２歳までの児童が初等教育を受ける施設。（ｂｙ　ういき様）

全国各所に設置されており、多くの子供たちが語らい、遊び、学んでいる。

とある小学校の３年生の教室は只今授業中であり、子供たちは教室の前にある黒板に注目
しながら一生懸命に授業に取り組んでいた。
そんな教室中のすべての生徒が黒板に集中するという状況の中、一人の少年は窓
の外を物憂げな表情で、その隣の少女はその少年をじ～っと見つめていた。

Ｓｉｄｅ　隣の少女

少女はその少年を見つめていた。

艶のある流れるような漆黒の髪は長く、背中の中ほどまで垂れ、う

なじのあたりで
白い紐によってまとめられている。

顔立ちは絶世の美少年とまではいかないが、１０人のうち８人は美少年と答えるだろう。
きりっとした感じではなく、柔和でどこか人を安心させるような顔立ちである。
身長は同年代の男子と比べてやや高めだが、特に目立つほどでもない。

しかし、一番際立っているのはその目だった。
日本人には珍しいその青の瞳はとても澄んでおり、まるで晴れ渡った青空を思わせた。

そんな少年が物憂げな表情でいるのを少女はただ静かに見つめて――

（…何考えてるのかな？……ハッ！もしかして私のこと？！……いやいや、何を考
えてるの、そんなことあるはず無い！…よね？……でっでも！もしそうだったら……）

――訂正。顔を赤らめ、悶々としながら見つめていた。

……ちなみに、それに加えて首をぶんぶん振ったり、にやにやしたりといった様子は明らかに怪しく、
すでに彼女の後ろの席の生徒は若干ひいていた。

まあ、そんな願いはむなしく散るのが世の常である。

しかし、神のいたずらか、その願いは叶えられた。

「……あっ。なのは死んだ。」

少女―高町“なのは”―の死亡宣告として。

「……にゃあああああ！！！なっなんで？どうしてなの？！！！」

Ｓｉｄｅ　物憂げな少年

隣から聞こえてきた大絶叫でふと我に返る。

どうやら、授業が退屈で暇つぶしに妄想をしていたら没頭しすぎていたらしい。
あわててまわりの状況を確認する。

時計――どうやらまだ授業中らしい。

黒板――十分に理解できる内容だ。

隣の席――なんだかさっきから喚いている。……面倒だから保留（声は聞き流す）

周りの生徒――クラスのみんながこっちを振り向いている（こっち見んな！）

先生――授業中に騒がれて怒り心頭。顔が鬼のように恐ろしいことになり、
その風貌はまさしく修羅といっても過言ではないようで……って、
あれ？」

もしかして…声に出てた？

「高町さん！！今は授業中ですよ？！静かにしなさい！！！」

「ごっごめんなさい！！」

「……そして大神君。」

ゆらりと俺に振り向く先生。

「……はっはい。」

がくがくと震える俺。

「何かいい残すことは？」

そうして先生はとってもイイカオをしながらチョークを構えた。

「……鬼とは言っても先生の場合は割ときれいな…そう！鬼子母j（ズドン！！！！）へぎょっ！？」

そして少年―大神（おおがみ）　式（しき）―はチョークの投擲を額にくらって意識を失った。

（……チョークの出せる威力じゃねぇよ……ガクッ）

《その後の休み時間にて》

「もぉ～～！！しーくんのせいで先生に怒られたの！どうしてくれるの？！」

「そうよ！私も聞こえたけど、いきなり「なのは死んだ」だなんて…意味分かんないわよ？！」

「私もそれが気になったんだけど……どうしてそんなことを言ったのかな？」

……いきなり仲良し三人娘に詰めかけられた

一人は高町　なのは　この件の被害者にして最古参の幼馴染

もう一人はアリサ・バニングス　強気な性格のツンデレお嬢様（金）

最後に月村　すずか　ほんわかしたおとなしいお嬢様オブお嬢様（

？）

一応、この3人は俺の数少ない友人であり、幼馴染である。

（……にしても、「なのは死んだ」って？……あぁ、アレのことか）

そうして俺は何を考えていたのか3人に話した。

「スーパーなのはシスターズ」

「「「……は？」」」

……なんか3人ともポカンとした顔をしている。…ヤバイ、おもしろい。

「授業中ヒマだったから超人ひげ兄弟のゲームをなのは主人公で考えてたんだよ」

「「「……は？」」」

ステージの中盤にも行けずに3死した。

小学校の授業は基本的に教科ごとで先生は変わらない。
つまり先生を怒らせてしまうとその日の間は何度もあてられるということもあるのだが……

「それでは大神君には問８の問題を「１６」…じゃあ問９を「７」…問１０「２９」…問ｊ「３２」……正解。」

即答だった。それもそのはず、なぜなら彼は――

（この程度の問題が出来ないようじゃ“転生者”の名がすたるってね？）

――『転生者』なのだから。

（それにしても、気づけばもう3年生。そろそろ“原作”でいう無印の始まるころか…）

なにげなく隣の席に顔を向ける。そこには授業に集中し、一生懸命にノートに書き込むなのはの姿がある。

思えばこの少女に出会ったあの日が、自分の一風変わった人生の始まりだった。

そんなことを考えながらシキはその日のことを思い起こすのだった……

To be continue...

プロローグ（後書き）

《あとがき》
ここまで読んでくださってありがとうございます。
さて、本作品は作者が普段から「リリカルなのはの世界にこんな設定の転生オリ主がいたら」と考えているものを文章に起こした（？）作品です。

初めてということもあって、至らないところは多いと思いますが、今まで読んできてくださってる方も今から読み始める方も、よろしくお願いします。
それでは、さようなら

第1話　非日常の始まり

『　　』はどこにでもいるようなただの学生だった。

小中高と特に苦労もなく進学し、半年前には実家から近い大学に入学した。
勉強やスポーツは特に秀でているわけでもなく、しいて言えば英語が少し得意というだけ。
高校でオタク文化にはまり、今では立派な（？）オタクに成長した。

そんな彼が最も趣味にしているのは読書である。
…まぁ、読書とはいっても彼の場合はライトノベルが主なのだが…

高校の頃は一日一冊のペースで読んでいた時期があり、友人からはふざけて「本の虫」と呼ばれるほどだった。
時がたつにつれて本に飽きてくると、今度はネットの二次創作にハマりさらにのめりこんでいった。

それからというもの、彼は休み時間や休日をほとんどその閲覧に費やすようになり、
いわば『携帯（もしくはＰＣ）小説中毒』となってしまったのであった……

そしてその日も彼はそのことばかりを考えていた。

《大学からの帰宅途中》

「よっしゃ！今日は休み時間に確認していただけで5～6作品は更新されてたな。」

彼の基本読書スタイルは休み時間などを通して更新をチェックし、学校にいる間は我慢に我慢を重ねて、家に帰ったら一気に読むといったスタイルだった。

「う～～～！早く帰って読みたい！！……なんて言ってる間についちゃったよ。」

そして彼は家の前に自転車を停め、高いテンションで玄関の扉に手をかけ……

「ソ〇モンよ！！私は帰ってきた～～！！！」

――次の瞬間には『真っ暗闇の空間』に立っていた。

「……え？」

…いったいこれはどういう状況なのだろう？
自分は確かに家の扉の前に立っていたはずだ。
周りを見る限り、そんな風景はまったくない。いや、

『風景というものが無い』

前も後ろも上も下も全てが真っ暗で何もない。

しかも、床が無いのに自分はまっすぐ立っている。……いや、浮かんでいる？

そんなわけのわからない、但し“ある形”で知っている状況の中で、彼は確証を得るための材料――

「……ようやく気付いたか。」

――『人物』を待っていた。

そして、その声を聞いて彼は確信を得た。

「あぁ……。はじめまして、“神様”？」

自分の日常は終わったのだということを

「……ほう？名乗ってもいないのによく気づいたな？」

……そこには真っ白な髪と緑の瞳、これまた真っ白なローブに身を包んだ青年が立っていた。

「（やっぱり…）まぁね。いつも“小説で”こんな状況は何度も見てきたから。…まぁ、そんなに若いのは驚いたけど。」

「…ふむ。ということは自分の今の状況もわかっていると？」

神は俺を探るようにしてそう尋ねた。

「おおかた、何かしらの事件でおれは死んで、この死後の世界にきた…ってとこだろ？」

最近はそんな転生オリ主モノばかり読んでたからな～。

「そのとおりだ」

「ちなみになんで俺は死んだの？」

最後の記憶は家の玄関前だけど、そんなところでどうやって死んだのだろう？定番は転生トラックだけど。

「家の玄関前でトラックにひかれて…「ちょっと待て！！」…どうした？」

本当に転生トラックだったことには驚きだが、それよりも気になることがある。

「大通りに面した家なら分からなくもないけど、俺の家は大通りから4～5回は曲がらないとつかないんだぞ！？
そんなところまでわざわざ来てそのうえ人様の家の玄関に突っ込むなんて、そいつバカなの？死ぬの？」

どんな神業テクを使ったらそうなるんだ？

「それが私がここにいる理由だ」

「……どういうこと？」

「死神の殺し方に『世界に干渉して事故死させる』という方法があるのだが…」

「すげぇな死神」

じゃあ、砂漠にいる奴に『溺死』ってしたらどうなるんだろ？

「…間違えてお前に『トラックにひかれて死ぬ』という呪いをかけてしまったのだ」

「・・・・・・・・・・・・。」

……時が、止まった。

「ちなみに運転手は奇跡的に無傷だった。」

「…イヤ、なんでだよ！？そんなところに奇跡使うなよ！その奇跡俺にくれよ！」

そうすれば俺は今頃！……あれ？小説をバンバン読むぐらいしか思いつかないぞ？

「運転手が奇跡の神の好みのタイプだったらしいな」

「うっっっっが～～～～！！まさかの仕込み！？しかもなんで重要なポジションの神がそんなやつなんだよ！？」

だれかロンギヌス持ってこい、そいつぶっ殺すから！！

もしくは上条さん「そんな幻想（という名のバカ）はぶち殺す！！」。

「殺すな」

……それから数時間にわたって暴れ続けた。

「……フゥ…ハァ……うん。まぁ、いいさ。元々、特にやりたい事があったわけでもないし。
けど、神様が来たってことは何かしらのサービスはあるんだろ？」
転生の提案とか、何かしらの救済措置はあるはずだ。……あるよね？なんかこいついい人そうだし…

「うむ。おぬしの願いを三つだけかなえてやろう」

「マジで！？なんでもいいの！？」

3つも叶えてくれるなんて…って、それどこの龍玉？

「あぁ。ただし蘇らせるという願いの場合は別の世界に限る。前世の世界ではお前は死んだものとして処理してあるからな」

（……う～ん。みんなに会えなくなるのはさびしいけど、せっかくこんな状況に出会えたのに
またいつもの日々にってのはもったいないしなぁ。けど、これで一つは決まったな）

「じゃあ、一つは『前世の俺に関する記憶・痕跡を全て消す』」

「なぜだ？」

「自惚れるつもりはないけど、俺が死んだら悲しむ人もいると思うからさ。
特に、今まで精一杯俺を育ててくれた家族に残すのが『悲しみ』だけってのは嫌だから…」

親孝行出来なかったのは心残りだけど、泣かせるぐらいならこんな親不孝者は忘れて幸せに生きてほしい。

「…わかった。世界から『　　がいたという事実』を消す」

「ありがとな」

「次に『俺を創作物の世界に転生させる』……あるんだろ？」

「あぁ。確かにあるが…なぜそう思ったのだ？」

「俺さ、電波説を信じてるんだ。アニメや漫画の作者はどこかからその世界の電波を受け取って自分が考えたと思いこむってやつ。今まさにこんなことが起こっている以上、それがある可能性も高いと思って」

「なるほど。その説は概ね正しい。さらに言えば、お前が転生したいと思ったのもそれに関係しているやもしれん」

「……？どういうことだ？」

「それと同じようにお前も電波…いや、お前の場合は魂のつながりがその世界と出来ているのだ」

「……え？じゃあ、俺が常々なんか世界に疎外感を感じていたり、他の世界に転生したいと思ったりしていたのもそれがいくらか影響してたってことか？」

「断定は出来ないが、その可能性は高い」

……これには驚いた。まぁ、それなら説明はつくし、自分でも納得は出来たけど…

「じゃあ、とりあえずそれで頼むよ」

「了解した。あぁ、それについて補足なんだが———」

「……え？」

それについて神にあることを依頼されたが、とりあえず叶えてもらえることにはなった。

「それで、最後の願いなんだけど……」

「どうした？言ってみろ。なんでも叶えよう。」

「…いや、なにも思いつかないんだよね…」

「……何？お前は珍しいやつだな。何かないのか、今ならなんでも叶えてやるぞ？」

「いや、さっきまでのやつでもう『神様に叶えて欲しい！！』って思うほどのものは無くなってしまってさ…」

「…欲のないやつだな」

「よく言われるよ…」

「……ふむ、ならば3つ目はこちらで適当に決めさせてもらうが、それでよいな？」

「ああ、それで頼む。…但し、何を叶えるかは言わないでくれ。その方が新鮮だし」

「うむ、わかった。期待するがいい」

そして……

「さぁ、旅立ちの時間だ。よい旅を、青年」

「あぁ。じゃあな、神様」

俺は旅立った。

「これで本当によかったのだろうか？」

彼が旅立った後。神は彼に関する資料を見ていた。

『死亡状況確認書』

その資料はその名の通り、死んだときの状況を記すものである。

神はその中の死亡現場の写真を見ていた。
神の言うとおりに彼が死んだのならば、そこにはグロテスクにつぶれた死体があるはずだったが――

――そこには『半径数十キロにわたって<消滅>した住宅地』が写っていた

To be continue...

第2話　（未来の）魔王様こんにちは、実は俺も…

――意識が浮上する

《―意識レベルの上昇を確認。起動プログラム、スタート―》

――深い深い、精神の奥底から

《―精神と肉体との接続を開始……完了。双方に異常なし―》

――彼方に見える光へと

《―生体機関の起動を確認。神経・筋肉にも問題なし―》

――最初はゆっくりと、徐々にスピードを上げて

《―続いて魔道機関の起動および“能力”と“強化回路”の点検を開始……完了―》

――光は目前に迫り

《―……全ての項目を完了。全工程、異常なし。》

――意識は光に包まれると同時に

《―起動プログラム終了。起動開始―》

――覚醒した

「知らない天j……青空だ」

目が覚めたらそこに広がっていたのはきれいな青空だった。

（……言いたかったな、あの名セリフ）

周りを確認しようとして、自分が地面であおむけに倒れていることに気付いた。

（そりゃ、見えるのが青空なのは仕方ないか）

改めて、立ち上がって周りを確認してみる。…どうやら自分はどこかの林の中に倒れていたようだ。
周りには木々がうっそうと生い茂り、そのほかには何も見えない。

そこから十数分かけてようやく林を抜けると、どこかの公園にたどり着いた。
結構広い公園で、子供だけではなく、カップルや親子の姿も見える。
そしてトイレが見えた時、俺は真っ先にそこへ飛び込んだ。

（トイレなら鏡があるはずだし、『今の』自分の姿を確認できる！！）

さっきからやたらとこっちを見てくる人たちがいるし、何より視界がどうにもおかしい。

そして鏡にたどり着き、目を向けるとそこに写っていたのは『黒髪青目の少年』だった。

「……おぉ！結構美形だな。目もきれいだし……ってこれが新しい俺の姿なのか？」

歳は大体4～5歳といったところか？
髪は肩甲骨あたりまで伸びているが、なんだかファッション的な伸ばし方ではなく、
どちらかというと病人のような伸ばし方だ。（G線上の魔王のハルみたいな感じ？あれよりは短い）

「う～～む。結局、正体は何なんだろうな？…なんか病院服みたいなやつ着てるけど……（ドクンッ！）っっ！！？」

そして自分の正体について考え始めた時、頭に激痛が走った。

「…あっっ、ぐぅぅ…っ！！」

まるで頭が万力で締め付けられたかのような痛み、そしてそれと同時に何かが流れ込んでくるような感じ

しばらくして、それがようやく治まった時、頭の中を様々な情報が駆け巡った。

「…ハァ…ハァ…やっと治まったか。……ってなんだこれ？」

そこにあったのは自分の正体、そして“能力”についてのことだった。

「……デルテミス製ヒト型魔道兵器『魔王』…ってまおう！？というか魔道兵器って…俺って人間ですらないの！？」

そもそもデルテミスなんて初めて聞いた。どこだよ？

そうしてまた半刻ほど混乱していたが、何とか落ち着いた。

「魔道兵器…要はロストロギアか。まぁ、基本的に体の構造は人間と変わらないみたいだし、
年もとれば血も出るっていうんだから別にいいか。」

…うん、フェイトやスバルあたりと張り合えそうだ。「俺なんか兵器（ロストロギア）なんだぞ！？」って
そうやって、自分が兵器だということを軽く流して、すぐに考える

のを止めた。
……それがただのやせ我慢と現実逃避だということを自分自身が気付かずに…

閑話休題、具体的にこれからどうするか思いつかなかったので、それについて考えながら町を歩くことにした。

そうして歩いていたのだが、かなりハードだ。
歩いていると周りの人の視線は感じるわ足が痛いわで倍疲れる。（歩き始めてから１０分程経って裸足だということに気付いた）
我慢して歩き続けていたが、とうとう疲れて立ち止まり、すぐそこにあった公園で休もうと中に入った。

…そうしてそこで出会ったのだ。何人かの子供たちが遊んでいる隅で一人さみしそうにたたずんでいる少女に。

「おーい。そんなさみしそうな顔して、いったいどうしたんだ？」

「…ふぇ？」

「だから、そんな顔してどうしたんだ？って聞いてるんだよ」

「あなたはだれ？」

「俺？俺は……通りすがりのおせっかいさん。君は？」

「わたしは『高町なのは』」

……ん？

「……今…なんと？」

「？だから、『高町なのは』だよ？」

「・・・・・・・・」

「どうしたの？」

「魔王様キターーーーーーーーーーーー！！！！」

「！！！」

「何これ？ここにきて初めて話すのが原作主人公ってフラグですか？フラグですねフラグですよねコンチキショウッ！！」

「しゅじんこう？ふらぐ？…なっなんだかしらないけどおちついて！」

「これが落ち着いていられるかーー！！ってか名前が『魔王』の時点でなんとなく予感はしてたんだよ！」

「まおう？よかん？…っておねがいだからおちついて～～！！」

「うっっがぁぁぁぁぁぁ～～～～」

落ち着いたのはそれから一時間後だった。

「…フゥ…ハァ…」

「うにゃ～～」

さて、何とか落ち着いたが…

（これがあのなのはか…確かにそんな面影はあるな。…ってことはさみしそうにしてたのはアレが理由かな？）

確か士郎さんがテロで重傷を負って、それで家がごたごたしてるんだったか？……それならすることは一つだな。

「……よし。なのは」

「…ふぇ？なに？」

「俺と遊んでくれないか？」

一緒に遊んであげることだ。

「ほっほんとにわたしとあそんでくれるの！？」

「あぁ。なのはがいいなら」

「いいにきまってるよ！それじゃあ、あそぼう！！」

「おう！」

そうして、俺たちは一緒に遊ぶのだった。

To be continue．．．

第2話　（未来の）魔王様こんにちは、実は俺も…（後書き）

《あとがき》

どうも、ワカタキです。
今回はなのはとの遭遇、および主人公の正体明かしでした。

主人公はタイトルでも分かる通りロストロギアです。まぁ、完璧にオリジナルなのですが。

さてさて、ようやくなのはに会えた主人公。次回はどうなるのか！？

それではさようなら

第3話　ミイラ時々脳内会議

前回、なのはと出会い、おせっかい精神から遊ぶことになった主人公

それから時がたち……

今日は疲れたな……でも家には俺を待ってくれている人がいる.

「ただいま、なのは」

「おかえりなさい、『あなた』。今日は遅かったんですね？」

そう、俺の愛する妻、なのはだ。

「あぁ、すまない。急によそから注文が入ってね。その対応に追われていたんだ。せっかく今日は大事な日だというのに…」

「そうですか、それは大変でしたね。でも……私はあなたが来てくれるならそれで充分嬉しいですよ？」

「なのは…」

「あなた…」

そして見つめ合う二人……しかし

「・・・・・・・・・」

「…？どうされたのですか、そんなに苦しそうな顔をして？」

「いや、なんでもない。」

そう、愛する妻と見つめ合ってなにがおかしいというのだろう？

「そうですか…。ところで、先にごはんにします？それともお風呂にします？」

「もうひｔ…。お腹が減ったからごはんかな。」

それとも……ってのに期待したのは内緒だ。

「そういうと思って、もう温めておきましたよ。」

そんな気配りができるなのはは本当に立派な奥さんだと思う。だから俺はそれを褒める。

「さすがなのはだね。俺はこんなにいい奥さんを貰って幸せ者だ。」

「フフッ私もこんな夫に貰ってもらえてうれしいですよ。」

そしてなのはもそんな俺を立ててくれる。

「なのは…」

「あなた…」

そしてまた、見つめ合う二人……だが

「・・・・・・・・・・・・・」

「…？どうされたのですか、そんな今にも血を吐いて倒れそうな顔をして？」

「いや、なんでもない。それじゃ、いただきます。」

そうだ、なんでもないったらなんでもないんだ！だから俺はなのはが作ってくれたご飯をたべる。

「めしあがれ」

「モグモグ。うん、やっぱりなのはの料理はおいしいなぁ。」

そしてその料理を褒める俺。

「そうでなくては困ります。なにせあなたへの愛をこめて作っているんですから」

そして、何とも嬉しいことを言ってくれるなのは。

「なのは…」

「あなた…」

そしてもう一度、見つめ合う二人……でもやっぱりっ

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・グハッ！」

「…？どうされたのですか、そんな口から砂糖を吹き出したような顔をして？」

「なぁ…。もう終わりにしないか？」

そう、俺はもう我慢できなかったのだ。

「そっそんな！！もう私に飽きてしまったというのですか？」

とても悲しそうな表情を浮かべるなのは…だけど、すまない。

「いや、なのはが悪いんじゃない。俺が耐えられないんだ。頼む」

俺が未熟なだけなんだ。

「・・・・・・」

「オネガイシマス」

だから……

「……しょうがないなぁ。じゃあ、つぎはブランコだね！」

…おままごとはもう勘弁してください！！

「恩に来ます！なのは様！！」

――おままごと、終了（モデル：高町さんちのバカップル）

「ああ～～～つらかった。……リアルに砂糖を吐きそうになった…。いつもあんな感じなのか？」

「ふぇ？だいたいあんな感じだよ？ちょっとだけしちえーしょんはかえたけど」

「シチュエーションな。よくそんなのに耐えられるな？」

俺なら精神病院のお世話になれる自信がある

「う～ん、もうなれちゃったから。……でもおとうさんがけがをしてからは…」

最初はあっけらかんというなのはだったが、段々その表情は沈んでいき、最後にはまたさみしそうな顔になった。

「・・・・・・」

（……マズイ、何とかしないと）

「・・・・・・」

「…よし！なのはしっかりつかまってろよ？思いっきり押すから」

（こうなったら遊ぶしかない！！）

俺はブランコに乗ったなのはの背中を押した。

「ふぇ？……うっうん。…ってうにゃ～～～！」

「うおぉぉぉおりゃあぁぁぁぁぁ！！」

…ただし全力全開で！！

「うっっにゃ～～～～！？」

「どうだなのは、すごいだろ？」

「すごいすごい！こんなにたかくまであがったのはじめてだよ！」

最初は驚いていたようだが、今はもう思いっきり楽しんでいるようだ。そこにさっきまでの暗さは無い。

「ハッハッハッハッハ」

（大成功だな！）大笑いする俺

「うわーーい！たかいたかーい。ばんざーい！！」

そして、楽しさのあまり万歳までするなのは……って万歳！？

「ハッハッハ。そんなに楽しいか～～……って馬鹿！万歳してんじゃねぇ！！」

アホかおのれは！！

「…ふぇ？うにゃ～～～～！？」

すごい勢いのブランコで手を離せば吹っ飛んでいくのは道理、おもしろいようにすっ飛んで行くなのは。

「クッ、まにあってくれ！！」

なのはの落下予想地点へ向けてかけ出す俺。

「うにゃ～～～～！！」

・・・・・（ガンッ！！）

そして、なんとかなのはと柵との間に体を滑り込ませた直後、俺は意識を失った。

意識が無くなる直前に見えたのは、泣きながら必死に俺に呼び掛けているなのはの姿だった。

（よ…かった……無…事…で……）

次に目が覚めたのはどこかの部屋の中だった。

（……？ここは？…って、やった！！ついにあのセリフが言えるぞ。いくぞ、せーのっ！！）

「知らない天j「あら、目が覚めたのね？」……美人さんだ。」

（また言えなかったよド畜生！！……で、この美人さんは誰だ？なんか見たことあるような…）

「あらあら美人だなんて…。はじめまして私はあなたが助けてくれたなのはの母の桃子です。」

目の前の美人さんは恥ずかしそうに微笑みながら、自己紹介をした。

……って『桃子』ってことはなのはの母親！？

「はぁ…えと、はじめまして？」

…この人って少なくともなのはは産んでいるんだよな？

「今、みんなを呼んでくるわね？」

「あっ、はい」

……あれが東洋の神秘か。まじパねぇ。

そして時がたち、高町家が部屋に入ってきた。

（おうおう来た来た。クールなイケメンに眼鏡をかけた美人。泣きはらした顔のなのはにミイラ男……って、え？）

「ッギャアアアアア！！ミッミミミミミミイラ～～！！助けて、お願いだから見逃してくださいぃぃぃぃ！！」

俺ミイラだけは無理なんだよ！昔見た映画でトラウマになってるんだよ！！

「落ち着きたまえ。私はミイラじゃないよ。」

「イヤァァァしゃべったぁぁ！？…って、え？」

え？ミイラじゃないの？……そういえばなんか見たことあるような…

「驚かせてしまってすまないね。私はなのはの父で高町士郎というものだ」

…士郎さんだった。

「え？…あぁ、はじめまして。…ってじゃあその包帯は怪我してるってことじゃないですか！！ナニ歩きまわってるんですか！？」

この人は馬鹿なのか？……ってそういや俺もあんまり痛くないね、修復機能かなんか？

「いや、なのはを助けてくれたというのにお礼を言わないのはどうかと思ってね？それにこれはまだ完治していないから巻いてあるだけであって、普通に生活する分には全く支障はないんだ」

だからってその状態で立ち歩くのはどうかと思うが……というか、

「お礼なんていいですよ。むしろブランコを思いっきり押した俺が悪いｎ「そんなことないの！！なのはが手をはなしたのがわるかったの。だからあなたがそれをかばって！！」……」

「謝られる筋合いは無い」って返そうとしたら割り込まれた。

「……まぁ、そういうことだよ。うちのなのはを助けてくれてありがとう」

……なんか高町家全員が頭を下げてきた。

「いっいいですよ、そんな。……もう、この話はおしまいってことで」

このまま拒否し続けてたらキリがなさそうだ。というか早く逸らさ

ないとなのはのテンションがヤバイ。

「ふむ。こちらはもっとお礼をしたいのだが…君がそういうなら仕方ないね。それじゃあ次に…」

そうして、話題をそらすことに成功したのだが…

「？」

（なんかいやな予感がする…）

「君は一体誰なんだい？なのはも名前を知らないようだけど…」

・・・・・・。

爆弾投下！？やっヤバイ！こうなったら…

ザ・ワールド！！時が止まる（↑元ネタなんだっけ？）

《―緊急脳内会議―》

一号「一号！」　二号「二号！」　Ｖ３「Ｖ３の！」

一号・二号・Ｖ３「「「脳内会議！！」」」

Ｖ３「やばいよやばいよ～！！大ピンチだよ～！？」

一号「ん～？何が～？」

二号「俺はお前の名前がやばいと思うんだが…」

Ｖ３「だってあの『こいつ千里眼でももってるんじゃね？』で有名な士郎さんに尋問されてるんだよ？」

二号「（無視か…）それがどうしたというんだ？適当に答えればいいじゃないか。」

一号「そ～そ～」

Ｖ３「士郎さんには嘘が通じない！それに忘れたのか？今の俺たちには住所！家族！戸籍！……何より名前がねぇ！！」

二号「……あ。」

一号「名前に関しては『新しい生活の邪魔になるだろう』って記憶から消されてるんだよね～～」

Ｖ３「気付いたか？今の状況に！さぁ、打開策を考えよう！！」

一号・二号・Ｖ３「「「う～～～む」」」

二号「…そうだ、嘘をつかなければいいんだ！」

一号・Ｖ３「？？」

二号「まぁ、それは俺に任せてくれ。お前たちは名前を頼む。」

一号・Ｖ３「「分かった」」

二号「それでは！」

一号・二号・Ｖ３「「「脳内会議、終了！！」」」

そして時は動き出す…

「実は俺、なのはに会う前に林で倒れていたんですけど……その前の（名前の）記憶がないんです！」

その方法とは……嘘ではないけど本当でもないことを話す！

「！！？……それは本当なのかい？」

「はい。（今思いついた）名前なら分かるんですが……って、一応言っておきますけどなのはをかばったからではないですよ？」

嘘を言っているわけではないということで、俺の心は静かで、士郎

さんも嘘を言っているとは思わないようだ。
……ってか、こうでもしないと適当な嘘なんかすぐこの人には見破られる様な気がする。

「ふむ…何という名前なんだい？」

「大きな神の『大神（おおがみ）』に……示…す…器……っ！？じゃなくて、数式の『式（しき）』です」
（大神は神様の力で転生したからだけど……示す器って何だ？とっさに違う漢字にしたけど…
なんで俺こんな名前にしたんだろう？）

「シキ君か……何か持ち物は無かったのかい？」

「病院服みたいなのを着ているだけでした。」

これは本当。今はおそらく恭也さんのお古を着ている。

「そうか……。それに関してはその道のプロである友人に頼んでおくよ。今はゆっくり休むといい。」

そこまで聞いた士郎さんは何かを考え込むようにしながら、そう言った。

「ありがとうございます」

その友人ってのが気になるけど、まぁ、どうせ何も分からないだろうなぁ。

「……さてもう遅いし、今日は終わりにしよう。また明日、今後のことについて話し合おう。」

あれから気付けばもう外は暗くなっていた。ってか、今更だけど俺このまんまここで泊るのな。

「「「「「おやすみ」」」」」

「おやすみなさい」

そして、高町家は部屋を出て行った。

……計画通り！！（ニヤリ）

To be continue…

第3話　ミイラ時々脳内会議（後書き）

《あとがき》

どうも、ワカタキです。

冒頭は結構ノリで書いてみました。……これが毎日繰り広げられていたら確実に死ぬ。
ところで、これがおままごとだと気づかなかった人はどれだけいるのでしょうか？
タイミング的にちょっと狙ってみたんですが……まぁ、いないと思うけど。

ちなみに能力使用は無印編が始まってからを予定しています。

それでは、さようなら。

第４話　家族

Ｓｉｄｅ　なのは　（作者のこだわりでほとんど平仮名になっています。ご注意を）

わたしは今、、ある人をおこしにいっている。

きのうしりあったばかりのシキくんだ。

朝ごはんができたので、おこしてくるようにとおかあさんにたのまれたのだ。

……おかあさんのかおがニヤニヤしてたのは気にしないの。

思えば、シキくんはとってもふしぎな人だった。

わたしのかぞくはさいきんおおいそがしだった。

おとうさんが大けがをしてにゅういんしたのです。今はかなりよくなってきたのでおとうさんがむりやり『じたくりょうよう』にかえました。

でも、それでもまだおかあさんとおねぇちゃんはお店とかんびょうでいそがしくて、わたしにかまってくれなかった。

おにいちゃんはしゅぎょーばっかりで、いっしょにはなせるときがない。

そんなりゆうで、わたしはおうちにいばしょがないような気がして、こうえんにきたの。
でも、わたしにはいっしょにあそんでくれる人はいなくて、こうえんのすみでただみんなを見ているだけだったの。

……そんなとき、その子はあらわれたの。

「おーい。そんなさみしそうな顔して、いったいどうしたんだ？」

「…ふぇ？」

さいしょはだれに言っているのかわからなかったの。

「だから、そんな顔してどうしたんだ？って聞いてるんだよ。」

けど、わたしにはなしかけているんだということに気づいて、あらためて目の前の男の子を見たの。
そこにいたのはぼさぼさの長いかみで、きれいな青い目がいんしょうてきな男の子だったの。

「あなたはだれ？」

「俺？俺は……通りすがりのおせっかいさん。君は？」

む〜〜。なのはがききたかったのはなまえなの！……でも、なまえをきかれたんだからなのははこたえなくちゃならないの。
だから、「わたしは高町なのはだよ」ってちゃんと言ったんだけど、その子はそれをききかえしたあと、いきなりあばれはじめたの！！

……まおうってなんなの？

そうして、すっごくながいじかんをかけてやっとおちついたとおもったら、
こんどはわたしをみてじっとなにかをかんがえはじめたの。

（なんだろう？……それにしてもきれいな目だなぁ…お空みたいな色なの！）

それから、なにかをけっしんしたようなかおをして言ったの。

「……よし。なのは」

「…ふぇ？なに？」

わたしはいきなりはなしかけられてちょっとびっくりしたの。

「俺と遊んでくれないか？」

けど、そのことばをきいてもっとびっくりしたの！！だからつい、

わたしはききかえしてしまったの。

「ほっほんとにわたしとあそんでくれるの！？」

きっと、そんなことをききかえすなんておかしい子だとおもわれるの。でも、その子はにっこりわらって言ったの。

「あぁ。なのはがいいなら」

いいにきまってるの！！すっごいうれしいの！

「いいにきまってるよ！それじゃあ、あそぼう！！」

「おう！」

それから、わたしたちはいろいろなあそびをしたの。

おにごっこをしたり、かくれんぼをしたり、すなばでとんねるをつくったりした。

あそんでいるうちに、この人はわたしをはげまそうとしていっしょにあそぼうとしてくれているんだって

すぐにわかったの。でも、たのしくて、うれしくて、なのはのことをそこまでだいじにしてくれているって

おもうとなんだかむねがぽかぽかして、だからわたしたちはあそび

つづけたの。

……おままごとでぎぶあっぷしていたけど……あまいの。ほんとうのおとうさんとおかあさんは
これよりもっとすごいの。このていどでよわねをはいてたらやっていけないの。

……けど、ほんとうにこの人とけっこんできたらしあわせだろうな
…とおもったのはひみつなの。

そうして、こんどはブランコであそんでいたとき、わたしがまたさみしそうにしていると、こんどもまた、
わたしをはげますように、こんどはせなかをおもいっきりおしたの！

さいしょはびっくりしたけど、なんだかとってもたのしくて、またはげましてくれたのがうれしくて、
わたしはブランコの上だということもわすれてついつい『ばんざい』をしてしまったの！

どんどんじめんにちかづいていって、もうだめだっておもったとき、その子がわたしをかばってくれたの。

でも、すぐに気をうしなっちゃって、わたしはなきながらおかあさんにたすけをもとめにいったの。

それからは、おにいちゃんやおねえちゃん、おかあさんがおうちにはこんだり、おふとんにねかせたりしてくれたの。

それから、きょうはちょうしがよくておきていたおとうさんもまじって、かぞくみんなにじじょうをせつめいしたの。

「そうか……。それなら、ちゃんとお礼を言わないといけないね。」

「おれい？ごめんなさいじゃなくて？」

あの人がけがをしたのはなのはのせいなの！なのに、なんでありがとうなの？

「あぁ、そうだお礼だ。きっと彼が求めるのはなのはがけがをさせてしまったことに対するごめんなさいじゃなくて、なのはを助けてくれたことに対するありがとうだからね。……まぁ、それも受け取らないかもしれないけど。」

「『ありがとう』……」

わたしにはそれがよくわからなくて、ただつぶやいてみたの。

「それじゃあ、私は彼の様子をみてきますね？」

「あぁ、頼むよ桃子」

それから、わたしはおかあさんがもどってくるまでずっとそのことについてかんがえてたの。

しばらくして、おかあさんがわたしたちをよびにきたの。

へやにつくと、あの子はおとうさんを見てさわぎだしたの。（たしかに、今のおとうさんはこわいの）

でもよかった、げんきそうなの。

それから、おとうさんがかれにおれいを言ったの。おとうさんの言うとおり、それをさいしょはうけとらなかったの。

でも、わたしがわるかったんだというと、ちょっとこまったかおをして、はなしをおわらせたの。

（あとからおとうさんがいうには、あれはなのはをこれいじょうくるしめないためだったらしいの！）

それから、おとうさんがかれにしつもんしたの。そしてびっくりしたの！！

あの子…シキくんには名まえいがいのきおくがなかったの！！……きおくってなに？

でも、それがだいじなものだっていうことはわかったの。（そのあとおかあさんにちゃんといみをきいたの）

それからは、もうおそいってことで、みんなおやすみして、そして今にいたるの。

やっとシキくんがいるへやについて、ドアをあけたらまだシキくんはねてたの。

なんだか、そのねがおをみるとむねがどきどきして、早くおこさないといけないのに、
わたしはシキくんのねがおを見つづけたの。……そんなとき、シキくんにへんかがおきたの。

さいしょは気もちよさそうにねていたのに、だんだんかなしそうなかおになっていって、ついにはなみだをながしたの。
わたしはそんなシキくんを見ているといてもたってもいられなくなって、気がついたらシキくんをだきしめてたの。

「おねがいだから、なかないでシキくん。」そんなことを言いながら……

Side out

――夢を見ていた。

自分がまだ『　　』だったころの夢。

俺は長男だが、上に姉がおり、いつも姉に怒られてばかりいた。

だから、そんな日は家の前の道で真っ暗の中、仕事から帰ってくる母さんをまっていた。
そして、帰ってきた母さんに泣きつくのだ。

「うわ～～～ん、おかあさああん！！」

「あらあら、どうしたの『　　』？」

お母さんはいつもやさしかった。俺の目線に合わせるようにしゃがみ込んで、そっと微笑んだ。。

「おねえちゃんにおこられた～～」

その時の俺にはまだ、お姉ちゃんは俺を苛めてるんだという認識しかなかった。

「また？…でもね『　　』。お姉ちゃんは『　　』のことが大切だからおこったりするんだよ？」

そして、お母さんの言葉に衝撃を受けた。

「うっ…ひっく……たいせつ？」

「そう、大切だから、『　　』に立派な男になってもらいたいからおこったりするんだよ。」

「りっぱなおとこ…」

「そう。じゃあお母さんが手をつないであげるから、一緒に帰ってお姉ちゃんに立派なところを見せないとね？」

その時の俺にはまだその事がよく分からなかったけど、お母さんと一緒なら大丈夫だと思った。

「うん！」

そうやってつないだお母さんの手は暖かくて、そして優しかった。

……でも、それももう無いんだと思うと悲しくて、さみしくて……

そうして、夢から覚めるとそこは高町家の客間だった。だが、どうもぼやけて見える。

さらに言えば体が重い。……ハッ！まさかこれが俗に言う金縛りか！？

……なんてことは無く、ただなのはが抱きついているだけだった。

「……何してんの？」

「ふぇ？……あっ、おきたのシキくん？」

「うん、まぁ、起きたんだけどさ。なんで抱きついてんの？」

「ふぇ？……うにゃあああああ！？ごっごめんなさい！！」

そんなに驚かれたらまるで俺が何か悪いことをしたみたいじゃないか…

「いや、別にいいんだけどさ。なんで抱きついてたの？」

そう、俺が気になっていたのはそこである。……いや、別に嫌ではないんだけどね？

「それは…その…」

だが、なのははどこか言いにくそうにして…

「…シキくんがないてたから……」

…訳のわからないことを言った。

「え？俺が泣いてた？ほんとに？」

「うん。いまも目がぬれてるよ？」

……そうして、ようやく自分が泣いていたことに気付いた。

（うわ、本当だ！目が濡れてる…でもなんで泣いてたんだろ？…怖い夢でも見たかな？）

「まぁ、いいや。それよりなんか用事あったんだろ？」

「…あっ、そうだった！朝ごはんできたからよびにきたの」

「了解。んじゃ、行くか」

「うん！」

……結局、夢のことは思い出せなかった。

さて、朝食の席で決定された今後のことについて話そう。

結局、俺のことは分からなかったらしい。当たり前だ、俺は本来ここに存在しないのだから。

なんでも、士郎さんの友人はどんな情報も一夜にして調べ上げられることで有名な腕利きの情報屋だったらしい。

しかし、その人でも俺について調べ上げる事は出来ず、分かったのは戸籍が存在しないということだけ。

なので、俺について情報が見つかるまでは士郎さんが俺の身元引受人になって、戸籍も知人の伝手で作ってくれるらしい。

……うん。なんてご都合主義。『なので』までの過程が全く分からない。

でも、こうでもしないと俺はこの世界で生きていくことは出来ないだろうから、文句は言えない。

だけどやっぱり気になったので、追い出されることも覚悟して、士郎さんに聞いた。

「本当にいいんですか？そんなことまでこんな得体のしれない奴に……」

俺ならそんな奴は直ぐに追い出すなり、警察に突き出すなりすると思う。

「かまわないさ。君はなのはの恩人だからね。確かに君は戸籍がないし、それに正直、記憶喪失というのも怪しい」

ばれてた！？でも、だったらやっぱり…

「それなら何故！「でもね、」…？」

「これでも人を見る目には自信があるんだ。少なくとも君は悪人じゃないだろう？」

「……善人のつもりもないです」

本当の善人というのはこの人たちのことを言うのだろう。

「それで十分だよ。それになのはと同じくらいの子供を放っておけるほど、私は冷たくないからね？」

「でもやっぱり！！」

俺はいつしか反対材料を探すようにして反論していた。

「お金のことは心配ないよ。今はオープンしたばかりということで店の方は休んではいないが、これでも前までは危ない橋を渡ってきたからね？

一人の家族が増えるぐらいなんでもないさ。」

そこで俺はまだ反論することが出来るはずだった。でも、士郎さんの言葉の一部分がそれを止めた。

「“家族”…」

なぜだろう？その言葉はうれしいのにどこかさみしくて、そして『怖い』。

「どうだい？僕たちの家族になってくれるかい？」

だけど、俺はそんな『家族』という言葉に誘われて、気がつけば返事をしてしまっていた。

「こんな俺でよければ、よろしくお願いします。」

『よろしく』

そうして、俺は高町家の一員となった。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ．．．

第４話　家族（後書き）

多少無理やりだけど、主人公の都合上、こうなるのは仕方ないかと。
……それに自分はご都合主義大好きなので！（書くときは）

第5話　それからの変化

前回、高町家に引き取られてから約半年が経過した。

……コラそこ！「飛びすぎだ」とか言わない！これでもプロローグまで飛ぶか迷ったんだからな？

さて、そうして約半年が経過したわけだが、いくつか変化したことがあった。

まず、見た目がマシになった。

……うん、何は言いたいのか分からないと思うので詳しく話そう。

みなさんは俺の容姿について覚えているだろうか？…いや、別に自慢するわけじゃない。

そこではなくて、見た目の第一印象に大きく関わってくるもの……

そう、『髪』だ。

以前の俺の髪は肩甲骨まで届くボサボサ妖怪（？）ヘアーだった。

で、その後風呂に入ったりして軽く手入れしてみた結果、すっごいきれいな髪だということが判明した。

……いや、俺は男だからそこまで髪に興味が無くて、表現は乏しく

なったが。

まぁ、俺はこんなに長いと邪魔になるなと思ったのでポロっと言ってしまったのだ。

「あ〜〜、なんか邪魔だな。スポーツ刈りにでもしようかな？」

ちなみに前世の俺はいつも髪が伸びたらスポーツ刈りだった。だからいつも通りそうしようと思ったんだが……

「「…今、何て言ったの？」」

……地雷踏んだ。

「あなた、そんなきれいな髪を『刈る』だなんて…全ての女性に対する宣戦布告ととっていいかしら？」

なんか、とってもイイ笑顔をしながら迫る桃子さん。……って宣戦布告！？

「そうだよ！！私も黒髪だけど、シキ君の綺麗さには負けるよ。……それを『刈る』？冗談もほどほどにしないと痛い目見るよ？」

いつもの空気っぷりが欠片も感じられず、むしろ怒りのオーラを纏って迫ってくる美由希さん。……その小刀はどこから出した！？

「いや、あの…ごッごめんなさい！！」

「「じゃあ、もうそんなことはしないと誓う？」」

「はいっ、誓います！！だから命だけはお助けを！！」

床に額をこすりつけ、許しをこう。人、これを土下座という。

「「・・・・・・・」」

黙り込んでこちらを見つめる二人。

「・・・・・・・」

がくがくと震えながら土下座を続ける俺。

そして……

「いいでしょう、これから髪に関しては私たちの指示通りにすること。いいわね？」

「次にまたそんなことを言ったら…容赦しないよ？」

「イエス、マム！！」

俺に抗う術はなかった。

それからは髪に関して二人に絶対服従を誓い、その指示のもと手入れをすることによってかなりマシになった。

……もう、妖怪ヘアーなんて言わせないっ！！（俺が言いだしたことだけど）

そして次に「ね～ね～なにしてるの？いっしょにあそぼうよ～（ゆさゆさ）」……

「あ～～、ちょっと待ってな。すぐに終わるから」

「うん。わかった～」

さて改めて、次に変わったのは、なのはがすごい甘えてくるようになったことだ。

最初はまだ少しよそよそしかったんだが、ここに置かせてもらう以上、なのはの相手を引き受けるくらいはしなきゃなということで、

「俺はなのはの家族になったんだ。これからはずっと一緒だぞ！」

っていったんだが……あれ、これってまるでプロポーズじゃね？

でも、それを聞いてからのなのはは俺に積極的に甘えてくるようになった。

陽気に誘われてつい昼寝をしてしまい、起きた時にはなぜかなのはが抱きついていっしょに寝ていて…

どこへ行くにも常にちょこちょことついてきて…

怖いテレビもしくは怖い夢を見た夜は俺のふとんに潜り込んできて…

その他にも、まるで今までのさみしさの裏返しだとでも言うように、俺に甘えてきた。……まぁ、いいんだけどね？

ともあれ、これでなのはの根暗化（？）は防げたと思う。

さて、次は「な～な～シキ～。いっしょにおにごっこしようぜ！！（グイグイ）」……

「…オールハイル？」

「ぶりた～にあ～！！」

「うん、よろしい。もう少し待ってくれ。」

…で、次に変化したことなんだが、金銭面が解決した。

これは後で知ったのだが、実は先日の士郎さんの「一人増えるぐらいなら～」の発言は少し無理をしたものだった。
いや、まるっきり嘘というわけではなく、生活すること自体は可能なのだが少し厳しく、貧乏生活も余儀ない状態だったらしいのだ。

じゃあ、それがどうやって解決したのかというと、それは士郎さんの知り合いからの寄付金だった。
以前に士郎さんにお世話になった人が、俺の引き取り話を聞きつけたのかオープン祝い＋怪我を心配しての寄付金を持って現れたのだ。

そのお金はなかなかの額で、決してそんな簡単に渡せるようなものじゃなかった。
当然、士郎さんは受け取りを断ったんだが、結局は押し切られて受け取ることになった。

詳しく聞くと、どうやらほとんど諦めていた事業が急に繁盛し、巨額の富を生み出したというのだ！

……なんというご都合主義。まるで神様が世界を操っているような…って『神様』？

よくよく考えてみれば、いきなりなのはと遭遇したこととといい、高町家に引き取ってもらえたこととといい、今回のこととといい。
いくらなんでも俺にとって都合がよすぎる。そう、まるで『神様がそうしている』ように。

「なぁ、お前なのか神様？」

だとしたら、これらの事についても説明がつく。…つまり

「これが３つ目の願いなのかな？」

けど、これからもこんなことがあるとは思えない。今後は自分の力で何とかしないとな！！……とりあえず、今は…

「ありがとう、神様」

お礼を言うことにした。

そして、次なんだが……

「ね～ね～。まだ～？（ゆさゆさ）」「はやくしようぜ～（グイグイ）」「あ～、ずる～いわたしも～（ぎゅ～）」「おれもおれも～（グイ～）」

・・・・・・・・。

「……うっっだぁ～～、うざったいっ！！お前らいいかげんに…って悪かった！泣くな！一緒に遊んでやるから！！」

……さて、お気づきの方もいるだろうが、俺は保育園に入園した。

あれから時がたち、士郎さんの怪我も完治して、今は短時間だが店にも出れるようになった。
そして金銭面も解決して、やっと余裕が出来たということで約2週間前に入園したのだが……

「ね～ね～、なにしてあそぶ～？」「おにごっこしようぜ！」「え～？サッカーがいいよ～」「おままごと～」

……めっちゃ懐かれた。

いや、俺は特に何もしていない。ただぼ～っとしたり、寂しそうにしてる子に声をかけたり、誘われたら一緒に遊んだり。
そうしていただけなのに、気づいたら人気者になっていた。…なんでさ？

……そういえば前世でも俺は何もしてない（むしろ避けてた）のにやたらと甥っ子たちがくっついてきたような…

「む～、しーくんはわたしといっしょにあそぶの！！」

…そうして、高町家のなのはさん参上。…あっ、『しーくん』は俺のことね。（シキくん→しーくん）

「なによ～、なのははいっつもシキくんとあそんでるじゃない！」
「「「そうだそうだ～！！」」」
「あたりまえなの！しーくんはなのはのものなの。」
そういって堂々と胸を張るなのは。…いや～、逞しくなったね～…ってオイ。
「こらこら喧嘩するな、皆で遊ぼう。それと、いつから俺はなのはのものになった。」
などと言ってその場を治め、一緒に遊ぶ。……保育園ってこんなに大変だったっけ？
そしてそれを微笑ましそうに眺める先生たち。……って、仕事しろよ！？
……そうして、保育園での時間は過ぎていく。
「それじゃあみなさん、さようなら～」
「「「「「さようなら～」」」」」

昼過ぎになり、園児たちは親と手をつないで一緒に帰っていく。
しかし、そんな中俺だけは誰も待つことなく、いそいそと両手両足に特殊な重りを付けていた。

「ねぇ、しーくん。きょうもらんにんぐするの？」
そんな俺を不満そうな顔で見つめるなのは

「あぁ。こういうのは継続することに意味があるんだ」

そう、俺は毎日保育園の行き帰りは両手両足に特殊（一見すると重りに見えない）な重りを付けてランニングをしている。
距離はそう大したことはないのだが、全力で走ったり、塀の上を走ったりといったポイントがあるため、
重りをつけた状態でそれを走るとかなり大変なのだ。ちなみに保育園が無くても毎日走っている。

「なのはもやろうかな…「それは絶対にやめとけ！！」…む～」
なのはが走ろうものなら、家に着くまでに何度転ぶことか…

「じゃあ、また家でな？」

そろそろ行かないといつ家に着くかわからん。

「うん…気をつけてね？」

「おう！」

そして俺は走り出した。

……そうして、家に着いてから一休みをして、今度は『道場で自主トレ』をしてしばらくすると……

「お？早いな、シキ」

恭也さんが道場に入ってきた……今日は恭也さんの番か。

「はい。今日もよろしくお願いします！！」

自主トレを止めて恭也さんに向き直る。

「あぁ、今日も厳しくいくぞ？」

そう言って準備をする恭也さん

「お願いします！！」

……そう、最後の変化は修行を始めたということだった。

To be continue・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9966l/

リリカルで『遺失物』な少年の漫遊記

2010年10月13日00時58分発行